

好仁会はなぜ「好仁会」という名前になったのか

—— ひとつの仮説として ——

一般財団法人好仁会理事長

赤塚義英

1. はじめに

一般財団法人好仁会は、今から 10 年前の 2012（平成 24）年 5 月に「創立 90 周年記念誌」を刊行しました。小山前理事長の陣頭指揮のもとに、とても丁寧に作られた記念誌は、今回、100 周年を迎えるに当たり制作することとなった本誌の土台であり、「90 周年記念誌」がなかったならば、本誌は生まれ得なかっただろうと思います。

私は、2016（平成 28）年 6 月に、小山前理事長の後を受けて、好仁会の理事長に就任しましたが、引継ぎを受ける際に、好仁会の設立に関し疑問に思っていたことが 2 つありました。

ひとつは、1922（大正 11）年に当時の中橋徳五郎文部大臣から賜った財団の設立認可書の所在です。「90 周年記念誌」には、2012（平成 24）年 3 月 21 日の日付で、石原慎太郎東京都知事（当時）から小山前理事長あての一般財団法人としての「認可書」のコピーが資料として掲載されているにも拘らず、創設当初のものはいろいろ探してみたが、そもそも所在不明だということです。これは、創設の翌年（1923（大正 12）年 9 月）に関東大震災が起こったことや、1945（昭和 20）年 3 月の東京大空襲のことなどを思えば、焼失し所在不明となったのはやむを得ないことだと思います。むしろ、所在不明であることが好仁会の歴史を物語っているのかもしれない。

もうひとつは、好仁会はなぜ「好仁会」という名前になったのかということでした。全国の国立大学附属病院（全部で 42 大学 44 病院）には、規模の差こそあれ、東大の好仁会と同様の財団法人（以下「病院財団」と言います）が設置されています。各財団の設立時期や、行っている事業、経営規模などはまちまちであり、一概には言えませんが、おおよそ「〇〇大学における医学の研究を奨励助成するとともに、医学部附属病院の患者診療・看護等に必要な助成、教職員・学生の学事研究等への便宜を与え、以って医学の振興と社会文化の向上に寄与」することを目的とするといった文言がそれぞれの定款に謳われています。ちなみに、病院財団の中で最も設立が早かったのは九州大学の恵愛団（1911（明治 44）年 12 月創設）で、次が北海道大学の協済会と東北大学の辛西会（いずれも（1921（大正 10）年 11 月創設）です。東大の好仁会は 4 番手であり、同期には名古屋大学の共済団があり、半年ほど遅れて岡山大学の積善会（1922（大正 11）年 9 月創設）や大阪大学の恵済団（1922（大正 11）年 12 月創設）が次々に設立されていったという経緯があります。

このように財団設立の時期には差がありますが、目的とするところはほぼ一緒です。それ

なのに財団名はそれぞれ個性的な名前を名乗っているわけであります。これには、各財団の創設者や命名者の強い思いや希望、哲学などが反映されているのだらうと思います。例えば、広島大学の緑風会（1961（昭和36）年12月創設）の場合、任意団体として発足した1957（昭和32）年8月の時点で、当時の塚本寛病院長から「原爆投下後の廃墟からの復興にむけ、新緑のさわやかな風を吹かす。」と命名されたことが同財団のホームページに謳われています。また岡山大学の積善会のホームページには、「儒教の經典の1つである『易経』には、「・・・積善之家、必有餘慶・・・」（善事を積み行う時は、己の身ばかりでなく、其の慶澤は子孫にまで及ぶことをいう。）『後漢書』にも「積善餘慶」（積もり積もった善行の報いとして慶福が子孫にまで及ぶこと）という言葉が記されており、当会の名称はここから採られたものと思われる。」と書かれています。さらに東京医科歯科大学の和同会（1931（昭和6）年3月創設）のホームページにも『『和同』という語源は、『君子和而不同、小人同而不和』（君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず（論語第7巻第13子路編23））から採られたとされており、島峰徹先生によって命名されました（長尾優先生著『島峰先生伝記』より）。』と明記されています。

翻って、わが好仁会の場合はどうなのか。これが全く分からないのです。このことは、「90周年記念誌」にも全く出てこないし、それ以前の「80年誌」や「70年誌」「60年誌」「50年誌」「40年誌」（好仁会は1962（昭和37）年11月の「創立40周年記念誌」を皮切りに10年おきに周年誌を刊行しています【写真1】）と遡っても、このことに触れている記録は見つけることが出来ませんでした。すべての財団の名称の由来が明らかであるわけではありません（その由来をホームページ等に掲載している財団はむしろ少数派です）が、天下の東大の、好仁会の名前の由来が全く分からないのは、いかがなものかと思った次第です。

2. 調査を開始

（1）東京大学医学部・医学部附属病院 150 年史

私は、自分が理事長である間に、この問題について一定の知見を得たいと考え、仕事の合間に様々な文献に当たり始めました。まず初めに、理事長室にあった「東京大学医学部・医学部附属病院 150 年史」（2011（平成23）年7月 第2版、東京大学医学部・医学部附属病院創立150年記念事業委員会編集【写真2】）を手に取りました。この本は、帙入りのA4版で780ページもある大部の出版物で、最近の50年を中心に編纂されていますが、1967（昭和42）年12月に刊行された「東京大学医学部百年史」の内容を概説している部分があり、そこにいくつか興味深い記述がありました。

ひとつは、同書の第1部 東京大学医学部百年史 概説 の第2章 医学部附属病院の100年の沿革 の中の次の記述です。

『百年史』では、第5部医学部附属病院の項、第1章医学部附属病院で本院の沿革、統計、中央診療部門、薬剤部、医学部附属看護学校・助産婦学校、財団法人好仁会について記

述し、第2章で学生保健診療所、第3章で分院について記述している。この章では、本院の沿革を再掲する。(同書 114P)

といたうえて、

大正13年(1924)6月14日 入院患者・職員・看護法講習生などの食事供給は従来に指定商人請負制度を廃し、財団法人好仁会の請負事業として発足した。時の医院長近藤次繁教授、三浦謹之助教授、入澤達吉教授が協議して自ら設立者となったもので、各5,000円、2,500円を寄付して設立資金とした。(同書 119P)

とあります。

もう一つは、第5部 年表と資料 の第1章 東京大学医学部・医学部附属病院150周年史年表 の中の次の記述。

1922年	大正11年	1月 教授三浦謹之助、入澤達吉、近藤次繁が財団組織の賄所(好仁会の始まり)建設資金を寄付
		(中略)
1924年	大正13年	8月 好仁会の賄所新築成る。

(同書 689P)

第1部第2章と第5部第1章とで日付や3教授の並び順が違うのが気になりますが、ここで注目したのは、「賄所」という言葉です。私は、このくだりを読んだとき、ある一つの仮説を思いつきました。それについては、あとで詳しく述べますが、もう少し、ほかの資料も当たってみる必要があるなと考えました。

(2) 東京大学医学部百年史

「東京大学医学部・医学部附属病院150年史」の記述から、「東京大学医学部百年史」には、第5部 医学部附属病院 の項に財団法人好仁会のことの特記されていることが分かったので、ぜひ現物を確認する必要があると思いました。けれども「百年史」は理事長室にはないので、東大病院の岩瀬事務部長に相談したところ、病院や医学部の事務室を探して1冊貸していただけることになりました。

「東京大学医学部百年史」【写真3】は、1967(昭和42)年12月20日に東京大学出版会から出版されたA5版で800ページの大冊です。その第5部 医学部附属病院 の第1章は附属病院、第2章は学生保健診療所、第3章は医学部附属病院分院という章立てになっており、第1章 附属病院 の中は、一 沿革、二 中央診療部・中央検査部、三 中央手術部、四 中央放射線部、五 輸血部、六 薬剤部、七 医学部附属看護学校、八 医学部

付属助産婦学校、九 財団法人好仁会 という具合に、病院の組織について詳述されている中に並んで、財団法人好仁会が独立した一節を与えられています。その文章を全文引用します。

沿革

財団法人好仁会は医学部における医学の研究を奨励助成し、同時に付属病院の患者を慰藉し、医学部職員学生の学事研修などに便宜を与えることを目的として、大正十一年三月、三浦・入沢・近藤三教授の寄付金により、文部大臣の認可を受けて創立された。当初は患者・付添人および職員などのため喫茶・果物・雑貨類などの販売を行い、次いで入院患者・看護婦の食事供給と付添看護婦の斡旋供給および理髪所を開設するなど、逐年業績の向上発展に努めた。日華事変・第二次世界大戦の勃発を契機として事業の継続は困難となり、休業に近い状態になったが、よく苦境に堪え終戦を迎えた。

戦後逐次物資の需給も好転したので、入院患者の完全給食実施を復活するとともに、医薬品の供給販売と夜間電報・電話の取扱を行い、また基準寝具の業務を開始し、あるいは医学図書館完成に伴い、医（薬）学部学生・職員などの便宜を図るため同館食堂の経営と写真・文具類などの販売を行う等、医学部ならびに付属病院の運営に奉仕してきた。

設立年月日 大正十一年三月二五日、文部大臣認可。

設立者寄付金 東京帝国大学教授三浦謹之助 五、〇〇〇円、
同入沢達吉 二、五〇〇円、 同近藤次繁 二、五〇〇円。

設立の目的

- 一、医学部における医学の研究を奨励し助成する。
- 二、付属病院の患者に賑恤を行う。
- 三、医学部職員学生の学事研修などに便宜を与える。

以上により医学の振興と社会文化の向上に寄与することを目的とする。

創立から現在までの歩み

大 11.2.14 三浦・入沢・近藤三教授の寄付金一万円により財団設立申請書を文部大臣に申請。

11.3.25 文部大臣財団設立を認可。

会 長 東京帝国大学総長 古在由直
副会長 付属医院長 近藤次繁
事務長 付属医院事務主任 小峯孝容

11.4.4 財団設立登記を東京区裁判所になし事業開始。

13.6.14 賄所を開設し病院との間に患者および看護婦の食事供給の請負契約を結び給食を開始するとともに一品料理の調製。

13.8.10 賄所（現給食部）建物鉄筋二階建、延二四七坪六六七の新営工事完了（東大に寄附）

- 昭 8.4.21 付添看護婦供給部を設け事業開始。
- 10.3.4 特別調理所および職員食堂の新営工事に着工。鉄筋二階建、延一五〇坪、工費五〇、〇〇〇円。
- 10.11.29 同建物竣工（大学に寄付）。
- 11.4.10 特別調理所業務を開始。
- 19.8.10 戦争のため給食物資の入手困難となり、患者および看護婦の給食事業を休止。
- 20.3.1 付添看護婦の不足と寄宿舍の焼失（空襲のため）により付添看護婦供給部を廃止。
- 20.4.30 販売商品・物資の配給不如意となり雑貨部を閉店。
- 23.11.1 雑貨部の業務を再開（委託）。
- 24.2.11 患者給食を実施。
- 27.6.20 薬品販売所鉄筋（八坪）建設、営業開始（大学に寄付）。
- 27.10.29 賄所倉庫鉄筋（四六坪）および鉄骨上屋（五三坪）の新営工事竣工（大学に寄付）。
- 27.11.14 創立三〇周年記念式を挙行。
- 32.10.1 薬局を新設し営業開始。
- 34.3.15 給食部三階会議室増築新営工事（延一二九坪六二）竣工（大学に寄付）。
- 35.12.26 東京大学構内特定郵便局新設建物竣工（大学に寄付）。
- 36.4.30 薬局業務休止。
- 37.1.16 医学部総合中央館（医学図書館）食堂・写真室および文房具売店を新設して営業開始。

（指田仲三）

（同書 527-8P）

末尾の指田仲三という人は、1970（昭和 45）年 11 月から 8 年半にわたり常務理事（事務長）を勤めた人で、「百年史」が刊行された頃は好仁会の総務部職員であった方です。これを読むと、財団創立の目的や事業に関する説明が主で、やはり名称の由来には触れていません。それにしても、昔の好仁会は次々に建物を建てて大学に寄付していたことが分かります。今の財務状況ではとても考えられないことです。

なお、「150 年史」で引用した大正 13 年 6 月 14 日の記事は、「百年史」では第 5 部 医学部附属病院 の第 1 章 附属病院 の、一 沿革の項（同書 473P）に、また、「150 年史」の年表の中の大正 11 年 1 月と 13 年 8 月の記事は、「百年史」では第 3 部 年表と資料 の第 1 章 東京大学医学部百年史年表 の中に、大正 11 年の 1 月 17 日（同書 275P）、大正 13 年 8 月 10 日（同書 276P）と日付入りで同文の記載がありました。

余談ですが、医学部附属病院の表記は「150 年史」では「附属」となっているのに対し、「百年史」では「付属」となっています。私の感覚では、一貫して「附属」の文字が使われ

ているはずだと思っていたのですが、勘違いだったようです。また、入澤達吉の表記も「百年史」では入沢となっています。

(3) 林栄子著「近代医学の先駆者 三浦謹之助」【写真4】

2011（平成23）年11月に叢文社から出た林栄子著「近代医学の先駆者 三浦謹之助」という本の中に、

後年、謹之助の在職二十五年の祝賀会するとき、集めたお金が残った。そのお金で賄征伐と一緒にした入沢達吉や近藤次繁たちと、大学の賄の好仁会を作って世話した。腕白時代の罪ほろぼしと言うよりは、食事の改善からである。（同書59P）

という記述があります。

その少し前の文章を若干長くなりますが引用します。

賄い征伐

寄宿舎の食事がまずいと言っては、賄い征伐を行った。賄は月三円と安いので、文句を言う学生のほうに無理があったようだが、賄を呼んで談判した。漬物などにかけて醤油を元に戻して使う。値段よりも品物が悪い。賄の奴が儲けるに違いないと、学生は騒いだ。

交渉した数日は幾分改善されるが、また故の木阿弥になる。学生は隊を組んで食堂へ押しかけて抗議した。みんなが机を叩いて、「早く持ってこい」と連呼する。だが、賄いの人はなかなか持って来なかった。学生たちは怒って、茶碗を床にぶつけて割った。謹之助もそうした悪さをして抗議した。

予科の寄宿舎は竜岡門の校門を入った左側に、三棟の木造があった。前のほうに舎監室、後の方には賄の建物があった。その寄宿舎は後に外来になった。（中略）

賄の人をよくないからと追い出した。賄の人は困って、株（食堂経営の権利）を売ってほかの人を入れる。当分は新しい経営者に代って食事がよくなるが、また悪くなる。学生は再び賄征伐を行った。賄の人は請負制で、学生が追い出すため、時々替わった。

寄宿舎に近藤次繁、青山胤通、甲野斐、北里柴三郎などの人らが当時いた。（後略）

（同書57-8P）

賄い征伐とは、学校の寄宿舎や下宿屋で、献立の不満などから寄宿生が団結して、炊事場の器物を壊すなどの騒ぎを起こすことで、明治時代から旧制高等学校などで広く行われたもの。正岡子規が1891（明治24）年4月に第一高等中学校で行ったものなど、随筆や文学作品の中に登場するものも多いですが、東大の寄宿舎でもこれが行われていて、かつ、このことが好仁会の設立と大いに関係があるというのは、この本を読んで初めて知りました。

3. 入澤達吉博士の資料を調査

(1) 入澤達吉著「雲莊隨筆」【写真5】

好仁会の名前の由来について、ずばり解き明かしてくれる資料がなかなか見つからない中で、創設者のひとりである入澤達吉博士が随筆家としても著名で、1933(昭和8)年に「雲莊隨筆」という本があり、これの1935(昭和10)年1月に出た再発本(白揚社)を入手することが出来ました。

その中の「明治十年以後の東大医学部回顧談」という文章の中に次の一文が見えます。

それから寄宿舍では何処でもあるやうに、医学部の寄宿舍でも賄征伐を随分度々やつた。色々な変遷を経てから、生徒が勝手に賄を選択すると云ふことになった、それで皆が評議の上で食堂を中央から右と左に分けて、左の方は安田と云ふ甲の賄、右の方は小泉と云ふ乙の賄を置いて競争させると云ふことにした。それで甲の賄の方が少し良くなると、乙の賄を食って居る者が多く甲の方へ移つて来て仕舞ふ。又乙の方が旨くなれば甲の方を罷めて多数が乙の方へ行く。余程良い知恵を絞った積りで居た。毎日見て居て、甲の方が少し菜が良いとか、飯が良いとか思ふと翌月から其方へ行き、乙の方の飯が良いとか菜が良いとか云ふと直ぐ月のかわり目から其方へ行つた。然るに焉んぞ知らん、内部は疾くにチャンと両方の賄方が一つになつて居て、片方を少し良くしたり、悪くしたりして居つたのであつた。

(321 P)

これも前出と同様の賄征伐のエピソードですが、入澤博士が学生時代の回想であり、好仁会につながる話は特にないようです。

(2) 杉並区が保管する入澤博士の日記類

2020(令和2)年7月、そうこうしているうちに、杉並区立郷土博物館【写真6】で入澤達吉博士の日記類の展示が行われていることを知り、訪問して見学しました。京王井の頭線永福町駅から15分ほど歩いた郷土博物館での展示【写真7】は、ガラスケース越しに日記類が6冊であり、想像していたよりも少なく、間近で見ることができませんでした。しかし、学芸員の方に伺うと、後に近衛文麿の邸宅となった荻外荘の元の住人が入澤博士であったこともあり、杉並区と博士とは深い因縁があり、その関係で、博士の日記類の大半を杉並区が保管していることが分かりました。

後日、学芸員の方とのメールでのやり取りにより、1922(大正11)年前後の博士の日記の中に、好仁会の設立時や名前の由来などについて何かわかるものがあれば調査に協力いただけないかとお願いしたところ、原本をデジタルデータ化しているので、閲覧は作業完了後をお願いしたいとのお返事をいただきました。

その後、2021(令和3)年6月に杉並区役所より、デジタルデータ化が完了したとの連絡があり、11月4日に杉並区役所を訪問し、データを閲覧させていただくことになりました。

地下鉄丸ノ内線の南阿佐ヶ谷駅のすぐそばにある杉並区役所を訪ねると、6階の教育委員会事務局の会議室に案内され、テーブルの上にノートパソコンが用意されていました。生涯学習推進課の本橋課長ほか2名の学芸員の方々と挨拶をさせていただいた後、早速、ノートパソコン上でデータを拝見させていただきました。私は、デジタルデータ化とは、博士の日記を読み解いたうえで、文字起こしがなされているものだと思い込んでいたのですが、そうではなく、博士の日記帳（当時市販されていた文具メーカーの博文館の日記帳）を、表紙から丁寧に1ページ1ページ写真に撮ったというものでした。何年にもわたっているので大変な分量（日記帳は1年で1冊となっており、それが何冊も）になっているし、博士の書いた文字は決して読みやすいものではなく、判読するのが難儀でした。限られた時間で有益な情報を得るためには、好仁会が創設された前後の時期の記録をピンポイントで読み解くしかないと思い、大正11年の日記帳を丹念に拝見しました。

その結果、大正11（1922）年2月1日に病院財団に対し2,500円を寄付した記事を確認することが出来ました【写真8】。しかし、なぜ財団の設立に至ったのか、例えば、九州大学や北大、東北大で先に設置されている財団のことや、それと同様のものを東大に設置することについて三浦教授と相談したとか近藤教授から相談を持ち掛けられたとか、また、なぜその名称を「好仁会」とすることとなったのか、誰がその名前を言い出したのかなど、何かしら経緯を示すものがあるだろうと期待したのですが、彼の関心事からは財団設立などはあまりにも些細なことであったのか、ついに見いだすことは出来ませんでした。入澤博士の日記は、何年にもわたっているとはいえ、その内容は途切れ途切れであり、おそらく財団設立について具体的な検討がなされたであろう大正10年のものはごっそり欠落していました。

4. 好仁会の名前の由来に関する仮説

これまで、様々な文献を繙いてまいりましたが、好仁会の名前の由来をズバリ解き明かしてくれる資料は見当たりません。そこで、先に触れたひとつの仮説について記しておこうと思います。

仮説：日本の民間信仰で台所や竈（かまど）の神様とされる「荒神さま」の「こうじん」を当て字で「好仁」としたのではないか

これは、「財団組織の賄所が好仁会の始まり」とあるという「東京大学医学部百年史」の記述に触発されたものであります。

「日本神さま事典」（2005（平成17）年9月、三橋健、白山芳太郎編著、大法輪閣）によれば、「食事は人間の生命を保つために不可欠であり、台所はそれを調理する場である。そのため、台所にはさまざまな神が祀られる。家の中の火所には、火の神・火伏せの神である荒神さまが祀られている。荒神さまは三宝荒神とも呼ばれる。（中略）現在でも、台所に小さな神棚を設け、三宝荒神を祀ったり、火所の近くにお札を貼ることもある。」とあります。

賄所とは食事の準備、調理をする場所であり、東大医学部では、入院患者・職員・学生などのための食堂でもあったわけですから、一般家庭の台所あるいは竈との連想は容易に行われたでしょう。そこから「荒神さま」へと連想がつながっていくことも容易であったろうと思います。したがって、財団の名称を「こうじん団」ないし「こうじん会」とすることは比較的早く決まったのではないかと推察します。この時点で、病院財団の前例は、九州大学の恵愛団、北海道大学の協済会、東北大学の辛酉会の3つですが、直前の二つが協済会と辛酉会であったことから、「団」よりも「会」のほうが参考にされやすかったのではないかと思います。

あとは当て字として「好」「仁」の字が当てられているわけですが、これはできるだけ簡便でかつ良い意味の字を当てたということでしょう。「好」は「好ましい」の意、「仁」は「慈しみ、おもいやり」の意で採用されたと思われます。同じ読みなら「幸仁会」とか「孝仁会」、あるいは「孝尽会」などというのもあったかもしれませんが、画数の少ない字で良い印象の「好」「仁」を採択したことに当時の命名者の見識を感じます。

5. むすびに

好仁会の名前の由来について、調査を行いました。決定的な記録は見つかりませんでした。実は、3人の創設者のうち、近藤次繁教授に関する調査が尽くされていないなど、調査自体は、不完全なものと言わざるを得ません。

そこで、好仁会の名称の由来について、何かをご存じの方がいらっしゃいましたら、ぜひお知らせいただきたいと存じます。仮説に対する反論でも結構です。

本稿の執筆、及び調査に当たり、好仁会の福田将英氏（総務部副部長）、東大病院の岩瀬鎮男氏（病院事務部長）、杉並区教育委員会事務局の本橋宏己氏（生涯学習推進課長）、徳重淳子氏（同課文化財係主査）、中村慧氏（同課文化財係 学芸員）に特にお世話になりました。この場を借りて、厚く御礼を申し上げます。

2022（令和4）年7月

参考文献

「東京大学医学部・医学部附属病院 150 年史」2011 年 7 月 1 日第 2 版 東京大学医学部・医学部附属病院創立 150 年記念事業委員会編集 東京大学医学部・医学部附属病院発行

「東京大学医学部百年史」1967（昭和 42）年 12 月 20 日 東京大学医学部創立百年記念会・東京大学医学部百年史編集委員会編集 東京大学出版会

「近代医学の先駆者 三浦謹之介」2011（平成 23）年 11 月 林栄子著 叢文社

「雲荘随筆」1935（昭和 10）年 1 月 5 日 入澤達吉著 白揚社

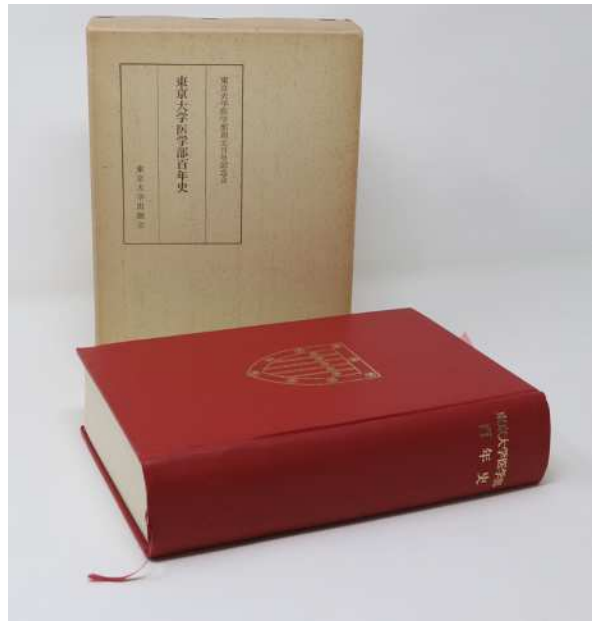
「日本神さま事典」2005（平成 17）年 9 月、三橋健、白山芳太郎編著、大法輪閣



【写真1】 (財)好仁会 記念誌 創立40周年~90周年



【写真2】 東京大学医学部・医学部附属病院150年史 (2011年7月)



【写真3】 東京大学医学部百年史 (1967年12月)



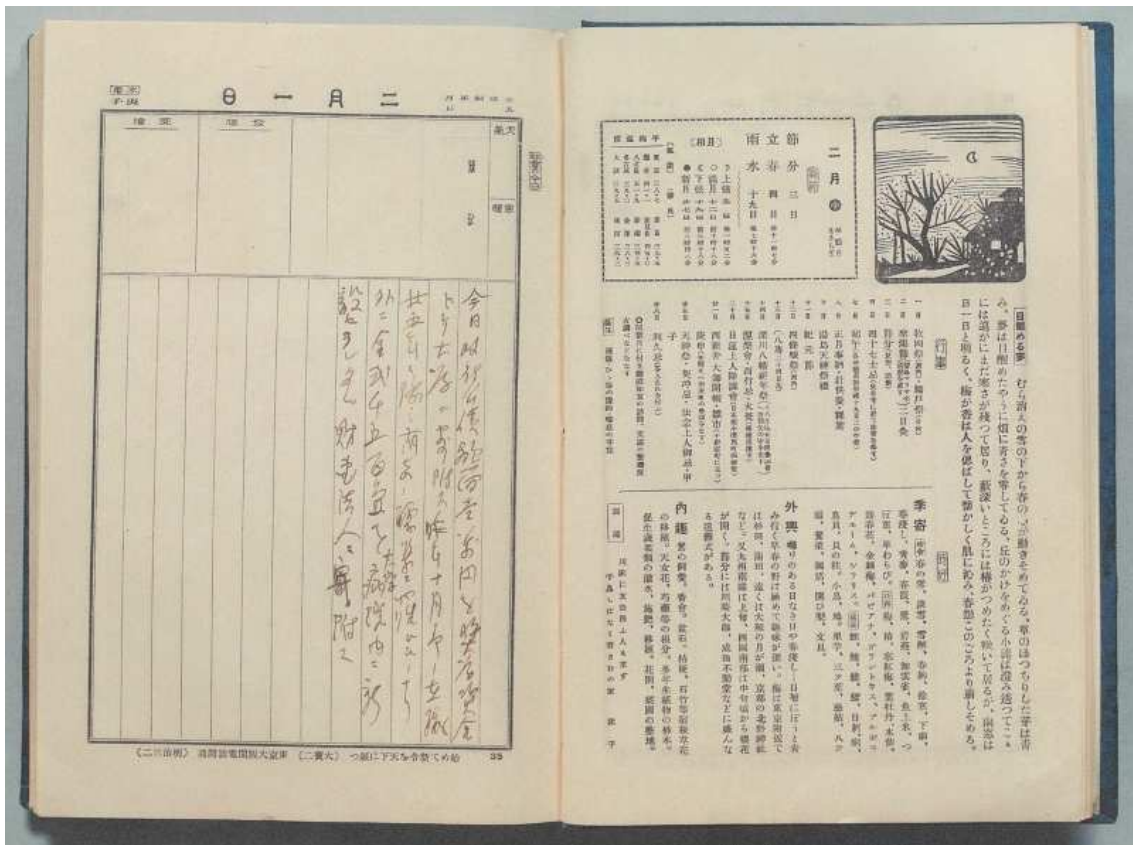
【写真4】林栄子著「近代医学の先駆者 三浦謙之助」（2011年11月）【写真5】入澤達吉著「雲荘隨筆」（1935年）



【写真6】杉並区郷土博物館（2020年7月）



【写真7】入澤博士の日記類展示



【写真8】入澤達吉博士の日記(大正11年当時)

「今日政府公債預金壹萬圓ヲ奨学資金トシテ大学ニ寄附ス 昨年十月余ノ在職廿五年ニ際シ有志ノ源資ニ罹ルモノナリ 外ニ金貳千五百圓ヲ大学病院内ニ新設セラレタル財団法人ニ寄附ス」と読める